



## ◆加藤静允の会景徳鎮・越州古窯・南宋官窯址訪記



Fig.1「景徳鎮深夜之図」



Fig.2「景徳鎮古窯址概念図」



Fig.3「3月2日夕食のとき」

中国大陸の土を踏ませてもらうのは今回が初めてのことなのです。1988年或る雑誌の天目茶碗特集で北京大学教授(考古学)楊根先生と天目作家H氏と私で鼎談したことがありました。その折「青花瓷器がお好きなのになぜ中国に来られないのですか」と聞かれ、バスに酔う私は「南昌から景德鎮までガタガタ道で6時間余りと聞いただけで少し恐ろしくなります。そのうち道路と宿と便所がよくなって、陶片が持って帰れるようになったらぜひ行かせていただきたいですね・・・」と答えたのを憶えています。

2005年3月1日(火)から8日(火)の7泊8日、景德鎮3泊、杭州2泊、上海2泊の焼物の旅。大阪市立東洋陶磁美術館の友の会のお世話で、楽しい旅をさせていただくことが出来ました。もう生きて中国の土を踏むことはあるまいと半ば諦めていたのです。時々夢にみる景德鎮の周囲の山々や昌江の風景、町や古窯址や物原ものばらの様子は夢のまままで終わるはずだったのです。ところが、昨年の暮にたまたま友の会から景德鎮への旅行計画のお知らせをいただきました。日本旅行南大阪支店をお願いして、3月とはまだずい分先の話しやなぁと思っている内に2月に入り次々に手続が進んで、留守中の段取りをすませ出発の日を迎えました。

京都駅を朝6:45に出発して、景德鎮着午後9時頃となっています。やっぱり遠いんやなぁと今更ながら感心していました。しかし実際は更に遠く、景德鎮着夜中12時すぎ、入浴就寝1:30a.m.でありました。

浦東空港まで出迎えてくださった宋小凡氏は非常に有能な案内人であり学者であり文人であることが、同行8日間のうちにわかることになるのです。上海虹橋空港につき遅めの昼食、はじめての中国での食卓を囲みました。好吃(hǎochí)です。食堂の水槽の中に染付の絵に見る魚達がいてうれしく挨拶しました。

南昌空港着7:30p.m.、空港食堂にての夕食、いかにも江西省にきたという好ましいものでうれしくなりました。黄山市から来た美しく気持ちよいバス、帰るまでの8日間ずっとお世話になります。9:30p.m.景德鎮へ262kmという、途中廬山の近くを走り、鄱陽湖の北を渡るはずですが暗くて何も見えません。南昌と言えば私には人民解放軍のことより八大山人のことがしきりに思われます。

景德鎮のお宿は大変立派なものでありました(Fig.1)。開門子大酒店といい一昨年に完成、珍しい名前で中国人でも首をかしげるそうですが、音が外資系のシーメンズから来ているとかで文字もよい意味だとわかります。景德鎮と言えば宿は合資賓館かと思っていたのですが、まだ'04～'05年版の旅行案内書にも開門子大酒店は載ってなかったので、ちょっと心配していたのです。宿に着いて大安心、部屋に入ってうれしく三つのよい夜を過ごすことが出来ました。

第2日目の朝がきて大へん贅沢なおいしい朝食をいただいて、ゆっくり目の出発。これがまた有難く同行の老紳士も「この30分遅い出発があわただしくなくていいですなぁ」と。朝起きたとき外をみると少し小雨が降っているようでしたが、出発のころには曇り、次第に明るくなり、このあと7日間晴天に恵まれて傘は全く不要でありました。

午前中予定を変更して先ず龍珠閣へ(表紙)。ここは市の中心珠山地区にあり、出土陶片の復元したものを多数展示しています。ここは元明清と官窯のあった場所、特に宣徳の染付と成化の豆彩の資料に興味をひかれました。宣徳のタミには技術的にいいかげんに見えるところがあります。これがよく還元がきいて沸えるとかつよく白地も冴えて美しく見えるのですが、少し温度が低いと諸にタミのべたべたした筆跡が出ます。成化の豆彩に用いられる染付はやや淡いものばかりかと思っていたら、こんなしっかりした濃い染付もあったんやなぁと感心、しかし、本焼で上手に上ってこの色絵もうまいこと上ってるのに何んでこれが捨てられ、破られたんやろと、その資料の来歴を想像しました。

拝見し終って外に出たら、通路のタイル代りに元染や釉裏紅のびっくりするような上りのよい陶片が嵌め込まれていて、思わず涎を垂しそうになりました。染付も見事な発色、特に釉裏紅は失敗作でないこの色はでないであろうと思われるよい紅色が出ています。思わずしゃがみ込んでしばらく眺めました。

繁華街を通り祥集土弄にこのる明代富商の民宅を拝見しました。文化大革命の嵐によく毀されなかったものです。ここはまた陶瓷の研究所でもあり、発掘の資料が多く見られました。所長の劉新園先生の解説があり、この建物は弘治年間(1488～1505)のもの、材は楠、下地を塗り漆がかけられているということです。また今後の古窯址発掘の話があり、観音閣の民窯発掘計画があること、芙蓉手の陶片が少し出たこと、祥瑞や古染の陶片は全く出ていないことなどを聞きました。本家の中国ではやはり官窯のものでないとあまり重視されないようです。祥瑞はともかく、古染の陶片は何処かの民窯で出ていることやと思っていたのですが。

『御窯廠』の額の上る復元の門をみて、浦濱南の『景德鎮陶録』の絵を想い出しました。珠峯を背にして大堂階段の下にこの門が描かれています。その巻一にある窯六種、青窯、龍綱窯、風火窯、色窯、艦煨窯、匣窯、種々の仕事の絵を描いているのに窯入れの次が開窯となっていて一番大事な窯焚きの図の無いのは奇妙です。開窯の図の右上に柴の束をまわりに置き、窯を焚いている図がみられ、太目の煙突から煙のふき上る様が見られます。景德鎮でみせてもらった本焼用の窯はこの形です。

午後、黄泥頭窯、楊梅亭窯と有名な湖田窯遺址をめぐりました(Fig.2)。黄泥頭窯の物原では五代・宋と思われる白磁の陶片が数多くみられました。さすが景德鎮と感激するものでありました。越州風の青磁の陶片もみられました。胎土は少し黒く焼き上っています。楊梅亭の物原は民家の間を通り、庭をぬけた裏山の斜面にありました。ここの白磁もきれいですが、数ある中に細い線彫りのある定窯風の陶片がありました。やっぱりいろんなものを焼いているのですね。音に聞く湖田窯はきれいに発掘調査されていて、夢にみた染付陶片の物原などは見られません。資料館は停電にて懐中電燈で拝見、寒い冷い所です。町の中を通り馬蹄窯遺址へ案内してもらいました。わざわざ門の鍵を開けて岡の上の窯址へ案内、東洋陶磁美術館のお力なのでしょう。窯への登り路に小さな明の染付の陶片が落ちていました。

たいへん密度の濃い1日を過しホテルへ帰り夕食。この日私の誕生日をさせていただきました(Fig.3)。添乗員の深谷

真吾さんがパスポートを見て知っておられたのです。お花とパースディケーキを頂戴して大変感激しました。生きて来れるとは思っていなかった中国を訪ねることが出来、その上そこで誕生日を迎えられるとは何と幸せなことでしょう。ありがとうございました。

第3日は景德鎮陶瓷館にはじまり、現在の上手な倣古作家を訪ねるのです。倣古製作第一人者という雲鵬氏の工房を訪ねました。元染の大盤、出来のよいのがあればと小遣いを貯めて持って来たのですが、幸か不幸か、これこそぜひにという作はありませんでした。倣古には倣古の良さがないとだめです。下手なにせものと言われることは倣古作には致命的です。三階の資料室を拝見、売り物なら欲しい陶片があり、ここでも涎を垂すことになりました。少し遅い昼食をすませ色絵の第一人者という江訓清氏の工房を訪ねました。朝から訪ねた所で必ず一つチキンカップの倣作を買ってきました。現代景德鎮の資料です。ここではお土産用に五個求めました。3時すぎから陶瓷文化博覧区を訪ねました(Fig.4)。古い窯場の状態がよく解ります。明の陶工童寶を祀った風火仙廟は移築再現ですが、風格がうれしいものでありました。

夕方人民広場の前の陶瓷自由市場で1時間の自由散策を楽しみました。後で地図をみて10分ほどの距離に古玩城があったことを知りましたがあとの祭です。

第4日目の朝は8:30a.m.少し早い出発です。風は少し冷たいがよい天気。黄山市屯溪へ向かう途中の山川の景色見飽きることがありません。東北に向って低い山間をひた走り低い峠を五つも六つも越えて。田畑あり山はスギなく、ツガが多い、マツもカシもあり竹藪多い。江西省と安徽省の境を越える。ここまで70km、屯溪まで117km。小川の水美しく小魚の群れを見ました。祁門キーメンの磁土採掘場の横を通る。ここの土が古染の頃に使われた土、よって虫喰の出る磁土となったと何かの本で読んだのを思い出します。

屯溪老街の碎石齋にて五代硯式青緑石の硯一面を買いました。値段は日本と同じくらいですが、この土地の思い出にと。杭州へは高速道路で北を廻り昱鎮関を越えて浙江省に入るとのことです。杭州市内での夕食は日本の中華料理と同じようで、もう景德鎮の味がなつかしく思われます。お宿は杭州ジャングリア、特上のホテルです。

高校の頃、中国文学に熱を上げていました。江南の地にかかわりのある文人は数多く、口について出る詩や文章はそのほとんどは忘却したとはいえ、折にふれて浮び上がってきます。

「欲把西湖比西子　淡粧濃抹総相宜」絶世の美女西施に比べられた可愛らしく美しい湖を早晚から日の登るまで堪能させてもらいました。右手に蘇堤長く伸びて麗しく(Fig.5)。

六和塔を右に钱塘江を渡り片側四車線の高速道路に入り余姚よあやに向います。しばらくして水郷らしき風景となり、南の方に紹興の町があるはずですが。陸游も魯迅もこの辺を歩いたのででしょうか。その南西の山麓は蘭亭のあったところ。曹娥江らしき河を渡ります。余姚I.C.をおりて慈溪市博物館にて越窯資料をじっくり拝見、今更ながらその歴史の古さと太さ感到嘆。この流れは北からの臨汝窯や鈞窯の風のみ込んで龍泉青磁の大きな流れとなるんやなぁと理解しました。

上林湖畔の青磁窯址は大谷光瑞の命をうけた飼田万太郎が1930年(昭5)に発見したことで知られています。その後中国の学者による調査で上巖湖、白洋湖、西白石山西麓などに20数ヶ所の窯址がみつまっているそうです。上林湖資料館を開けていただき秘色二点自然光の下でじっくり見せていただきました。また上林湖を舟で渡してもらい、対岸の荷花芯窯唐代遺址を訪ねることが出来ました(Fig.6)。景德鎮とは異なり我が国丹波の割竹窯のような登り窯です。青磁は特に還元のかけ方と冴えた状態に煙を吸着させず焼き抜くのが命です。晩唐の陸龜蒙の詩を想いました。「秘色越器　九秋風露越窯開　奪得千峯翠色来」と、たしかに南の青磁は山の緑の青で、北からの青磁は水の青という感じがしますね。汝官窯の色は主の住む恐ろしい洲の色です。

途次、寺龍口古窯址へ、民家の庭を通り抜けて裏山へ上り物原をみました。古窯探訪はこの季節が最適です。冬のあまり寒いのはいやですし、もう少し温かくなれば物原には蛇や虫が多く出てきます。さすが友の会よく考えて計画してはるんやと感心しました。

第6日目午前中西冷印社に立ち寄り、次いで隣の浙江省博物館へ。杭州歴史博物館を見て、午後南宋官窯博物館とその窯址をめぐりました。鳳凰山(209m)の位置から見るとここが郊壇窯の址のようです。次いで案内された山の上の老虎洞遺址は、万松嶺路からみて南宋皇室禁苑の西側に散在したという修内司官窯址の一つのように思いました。米内山庸夫(1930年頃に杭州領事)の修内司官窯の報告が1952～54年の『日本美術工芸』誌上にあるとか、読んでみたいなぁと思っています。

杭州市内に帰り湖畔の友誼商店に行きお茶をご馳走になり、ガマの油売りより上手な口上のお姐ロンジンさんに龍井茶10個みごとに買わされて・・・、杭州にさよならして、高速道路に入り上海へ約3時間、9時前にホテルへ着きました。上海はすごい都会です。お宿は上海四季酒店 '02年春オープン、優雅さが人気のホテルです。

第7日(3月7日月曜日)も快晴、午前中上海博物館へ、金冬心、倪雲林のコピーを買いました。午後二組に分れ、豫園組と古玩街組と、古玩街に早く行きたかったけれど先ず豫園拝見。後で古玩街に行ったのですが20分ほどしか時間が無くて、たいへん残念でした。

浦東を遠望し外灘を散歩し、明日はお別れというので皆さんの各々のカメラに集合写真を撮りました。さすが東洋陶磁美術館友の会の人々、それぞれにしっかりした個性をもち、温かて他を侵すことがない、いやな思いなど一度もせずに、よい旅ができました。

ご同行の皆様方、お世話下さった方々に深く深く感謝する次第です。(小児科医)



Fig.4「陶瓷文化博覧区」



Fig.5「眼下に西湖のすべてを楽しむ」



安 <small>ア</small> ：省南部 屯溪への道	余姚への道 紹興遠望
屯溪老街 倣古五代緑石硯	越州古窯址 上林湖畔、寺龍口

プロフィール

かとうまよぶ
加藤静允氏
1936年京都市生まれ。'61年に京都大学医学部卒業。'76年に日本専売公社京都病院小児科医長および京都大学小児科講師(非常勤)を辞され、ご父君の小児科医院を継がれました。現在、日本小児科学会代議員、日本小児保健学会評議員、京都府国民健康保険審査委員長。公職や本業の小児科を開業されるかわら、作陶・骨董・釣りにも造詣が深く、白洲正子氏との交友は広く知られています。著書も数多く、今回は、友の会会員の一人として旅行に参加されましたので、通信へのご寄稿を特にお願しました。